

「ふむ……私に、その警備用ロボットを造ってほしいというのだね？」

少々お腹の出ている博士は、鼻の下にほどよくたくわえた白髪混じりの髭を左手の指で優雅になでつけた。

「そうなのであります」

全身黒のタイトなスーツに身を包んだ警備会社の男は、その高い身長を少しでも博士に合わせるべく、腰を屈した状態でやや苦しげに頷いた。

「三カ月後に行われる会議は、地球上にあるすべての国を統一するという、この二十二世紀において最大かつ最重要な議題を呈しているのです」

広く白い研究室内によく響くバリトンだ。

「ふむ……世界を統一、か。それがいいことなのか悪いことなのか、私にはよくわからないが、今までバラバラだった法律や習慣、治安、言語、さらには貧富の差などをなくしひとまとめにしようというのだから、当然反対派も現れるだろうことは、予想に難くない」

「おっしゃるとおり」

男はもう一段階腰を折った。「この半世紀で各国において統一会議……我々はこの呼んでいるのですが、それがなされ、市町村から区、県、州と徐々にその国内での統一が図られてきました。その度に、必ずといっていいほどテロなどの襲撃や暴動が発生しています。そうして各国の首脳や重要人物が危機に陥る、或いは実際に命を落としていることも、周知の事実です」

「ふむ……日々研究に明け暮れて世間の事情などよく知らんこの私でも、耳にした事はある。反対派にとっては、今まで培ってきたものを白紙に戻すようなことにもなりかねんからのう。『自分』という存在が消されてしまうような不安に駆られるのかもしれない」

博士はふさふさした眉毛を寄せ、もともと松の葉ほどに細い目をさらに細めた。

「私も、もし今から英語を覚えろなどといわれたら、とてもかなわんなあ」

「おそらく、世界中の大多数の人間は、博士と同じような心境であろうと察します」

男はほんの少し顎を上げ、口元をニヤリと緩めた。そうして苦しい体勢から身を解放するように姿勢を正すと、また真剣な表情に戻り、語り出した。

「しかし、先ほど博士がおっしゃったように、世界中の法をまとめ、貧富の差をなくすというのは、実に素晴らしいことだと思います。それこそ人類が住むに相応しい理想の世界ではないでしょうか。確かに、始めは大変かもしれないかもしれませんが、もしかすると始めどころか、私たちが生きている間はグクシヤクした生活を余儀なくされる可能性もあります」

博士はぎょっとしたように眉間の縦皺を深めた。口がへ字に歪む。

男は口調をより強めて続けた。

「けれども、我々の子孫にとってはどうでしょうか？ 環境が変わっても、十年二十年経てば人間は否応なしに適応していきます。子孫にしてみれば、統一された世界というのがすでに当たり前の世界になっているのです。」

そう、つまり今回の統一会議の目的は、目先のことに捕われるのではなく、はるか未来を見越した計画を実行に移す……そのための第一歩を踏み出すという重要な目的なのであります」

男の唾がかかりそうな気がして、博士は顎を引いた。

同じ距離だけ男は顔を近づける。

「世界はいまやっとな国内での垣根が取れ、本当の意味でのひとつの国になったところですよ。県や州はなくなり単に区画分けされた番号表記のみで地域の差というものはなくなりました。」

博士もご存知のように、以前は東京都港区六本木などと表していたものが、地域の名称がはずれ、日本 1 2 5 8…というように、どこに行っても『日本』ということだけで法律も統一されました」

「逆に住所とか分かりにく……」

「世界各国でこのような統一がなされ、やっとな全世界レベル つまり『地球』としての統一が始まるうとしていたのです！ 実に素晴らしいことです！

それなのに、またしても世界各国内では反対派が台頭し、妨害工作を企てているとの情報が入っているではありませんか。しかも、これまでにないほど大規模な反乱を画策しているとのこと」

とんでもないことです！

これまで統一会議でことあるごとに襲撃を受け、要人の腰が引けているとい

うのに、最後の最後で大打撃を食らうことになったら、これまで築き上げてきたものが一瞬で水の泡です！ 今回は何が何でもなんとしてでも、絶対にヤツらの襲撃を阻止しなければならぬのであります！」

男がふんつと吐いたひとときわ荒い鼻息で、机の上に積もった埃がふわりと舞った。

「さらに！ 反対するのは生活面の変化を悲観する者だけではありません！ 軍事産業を主とする企業なども難色を示しているのです！ 世界が統一されれば激しい争いが激減するのは必至！ それこそ死に物狂いで会議を妨害しようとするのは目に見えています！ そついう輩にも対処できる最強の警備ロボットを、博士には造っていただきたいのであります！」

じわじわと男に詰め寄せられ、逆海老反りのような体勢になってしまった博士は、額からひと筋の汗を滴らせ、「ぐくりと喉を鳴らした。

「わ、わかった。君の熱意には恐れ入った。これまでにない最高傑作の警備ロボットを造ろうじゃないか」

餌を目前にしたゴリラのような顔をしていた男の表情はみるみるとけ、頬を赤らめた恵比寿さんのような笑みに変わった。

「よろしく願います！」

男は博士の手を固く固く握った。その万力のような握力に、博士は目を白黒させることしかできなかった。

「どうかね？」

「」

ん？ 博士はなんの応答もない男の方に顔を向けた。が、見なかったことにしようかと思った。

男は至福の笑みをたたえながら涙を流していた。

「 素晴らしい！」

二人の正面にはメタリックの塗装を施したシユールな体型の人型ロボットが立っていた。どことなくASIMOの面影を残しながら、さらにウエイトは絞られ輪郭は丸みを帯びている。一見したただけでは、フルフェイスのヘルメットを被った中学生くらいの子供がシルバーの全身タイツを着て立っているかのよ

うだ。

「触ってもいいですか？」

「ふむ、構わんよ」

男の反応に満足げに、博士は髭をなでつけた。

男はロボの二の腕あたりをさすりながら、

「鉄っぽくないんですね。プラスチックにも似てるけど、それとも違うし」

「特殊な鋼板に特殊な塗装を施している。それによって素材の強度と衝撃吸力を増しているんだよ」

博士はロボの後ろ側に回ると、ちょうど頂あたりに手をやった。

フルフェイスの奥に淡いオレンジの光が灯る。

「操作パネル」

ロボの目を見つめながら博士がいうと、フルフェイスの切れ目、人でいうとちょうど口に当たる部分からCDを載せるようなトレイが出てきた。トレイと違うのは、円盤を載せる部分に薄っぺらなボタンが並んでいることだ。

「君の命令を聞くように登録しよう」

博士は右手でいくつかボタンを押しながらいった。

「まず右手の人差し指と中指をロボのぼんのくびに当てたまえ」

「ぼんのくび？」

「頂のあたりだよ」

男は、必要もないがスーツの袖を捲り上げていわれるままに手をあてた。

フルフェイスの奥の光が一瞬強く輝いた。

「次は左目でロボの目の奥を見つめて」

男はかなり腰を屈め、目の高さを合わせた。またロボの目の光が瞬く。

「最後は声だ。このボタンを押しながら自分の名前を告げたまえ」

博士の示すボタンを押しながら、男は名乗った。ロボの目の光が赤く光ったかと思うと、三回点滅してまた淡いオレンジに戻った。

「これで登録完了だ。あとは君が命令するだけで、意のままに操ることができる」

「これだけで？」

「そうだ。すでに人間並みの思考パターン、行動パターン、反射パターンは登

録してある。つまり普通の人間として扱うことが可能なのだよ、もちろんある程度の会話も」

「はあく…た、試してみてもいいですか？」

「いいとも」

男は訳もなく手をすり合わせ、二度咳払いをした。

「よ、よし、右手を上げる」

なんの躊躇もなく、ロボは右腕を上げた。実にスムーズな動きだ。

「あ、上げた手の指を適当に動かせ」

「適当な、という表現にも迷うことなく、小指から親指までをパラパラと折って見せる。」

「なにか面白いことをいってみろ」

「布団がふっ飛んだ」

スピーカー越しの子供のような声だ。

「実にくだらない冗談ではあったが、それよりもロボの素晴らしい出来に男は感激していた。また涙が溢れる。」

「すごいですな」

「ふむ、これだけではないよ」

博士はもったいぶるようにニヤつき、続けた。

「あの花瓶を見たまえ」

その言葉に男が部屋の隅に目をやると、スリムな置き台の上にクリスタルの細長い一輪挿しが載っている。花はない。置き台も花瓶も、この部屋には似つかわしくないなと男は思った。

博士はそれを指差し、

「ロボ、あの花瓶を撃ち壊せ」

ロボの首がクルリとそちらに回る。と同時に、フルフェイスの奥から一直線に閃光が走る。

バスッ

花瓶は瞬時に形を失ってしまった。その後ろの壁はこんがりと焦げ、薄く煙を上げている。

「標的認識からビームを撃ち出すまでの時間は、わずか一五ナノ秒。どんなに

高速に動く物体でも、まず逃すことはない。その威力も、ショックを与える程度から完全なる破壊まで、幅広く調整できる。またX線や赤外線、熱感装置、音感装置、その他あらゆる感知システムを搭載し、指定した標的を的確かつ瞬時に捕捉してしまう。運動能力も優れたもので、移動速度はマツハにまで達し、瞬発力も　まあ実際に見せよう。ロボ、花瓶の載っていた置き台をここに運べ」

ロボの姿が一瞬ブレたように見えた。気づけば、ロボの脇には置き台がある。まさに、瞬きする間もなかった。

「たった三ヶ月で、よくもまあここまでのものを……素晴らしい！　素晴らしいすぎる！」

男は襲いかかる勢いで、博士の手を握った。

「ありがとうございます、ありがとうございます！　これで今回の会議はどんな妨害を受けることもなく、円満に進行していきます！　世界の統一は、もはや成し遂げられたも同然です！」

涙を流し破顔する男の顔は見るに耐えなかったが、博士もかろうじて笑顔をたたえ、男の手を握り返した。

「ふむ、役に立てて嬉しいよ。……で、費用はどこに請求すればいいかね？」

男は自宅に戻ると政府上層部に博士宛の（莫大な）研究費用の振込みを依頼し、連れてきたロボに相対した。

ロボは車の助手席に座らせて運んだ。命令するだけで素直にいうことを聞き、しかも人間と同じように動くのだから非常に扱いやすかった。

「助手席に座れ」「降りろ」「ついて来い」だけでいいのだ。

男はリモコンを手にし、壁面の巨大スクリーンのスイッチを入れた。それだけでブレーカーが落ちそうな大迫力の画面は光を放ち、電気をついた部屋をさらに明るくする。

画面には立派な門の前に立ち並ぶ人の群れが映し出されている。異様なのは、その群集を押し戻そうとする警備と思しき制服を着た者を除き、すべてが覆面をつけていることだ。

「こいつらはみんな明日開かれる会議に抗議してきた連中だ。デモを起こすこ